

# Jane Austen と名前

——或る試み——<sup>(1)</sup>

榎本みな子

Jane Austen の兄 James と Henry が中心となって1789年の一月から翌年の三月まで発行された Oxford の定期刊行物に *The Loiterer* というのがある。それは B. C. Southam の研究によれば、当時の ‘literature of sensibility’ を多く問題としてとりあげ、その行き過ぎをいましめているといわれており、その題目は Henry Mackenzie の主宰した定期刊行物 *The Lounger* をまねたものと考えられている<sup>(2)</sup>。Henry Mackenzie というと妙な作家で、一方では所謂 ‘novels of sensibility’ の筆頭にあげられながら、他方ではそのエッセイの中では過度の sensibility を強く批判しているのだが、Jane Austen の一家の者がそのエッセイの中での Mackenzie をよく知っていたと思われる。Jane 自身も *Northanger Abbey* の中に Mackenzie の別の定期刊行物 *The Mirror* に言及していることでも分るように、そのエッセイはよく知っていたのである。それが彼女の “over-refined sensibility” に対する批判に影響したであろうことは容易に推測出来る。

ところでこの Henry Mackenzie の *The Mirror* の No. 7 に次のようなことが言われている。

Every one must have observed the utility of proper selection of names to a play or a novel. The bare sounds of *Monimia* or *Imoinda* set a tender-hearted young lady a crying; and a letter from *Edward* to *Maria* contains a sentiment in the very title.<sup>(3)</sup>

即ちここで Mackenzie は小説や劇における人物の sentimental な名前が果すと思われる効果を ironical に述べているのである。彼は其処で自分には色々な名前とその効果を示したリストがあるから、若し小説でも書かれたら、名前のところだけはブランクにして私のところへ送って下されば、最も適當な名前をそのリストから選んで、書き入れて送り返しますと提案している。この ironical な口調の背後には当時の小説に著しく見られる romance 風の名前にによる人物などがあることが考えられるが、事実18世紀末に流行した “novels of sensibility” には独特の connotation を持った romance 風の名前が私達の気付く範囲でも中々多い。Jane Austen の先輩作家と言える Fanny Burney の作品の中から、Evelina とか Cecilia などという名前を代表として選んでもその一端が知られるであろう。Mackenzie が上述の例であげている Monimia などという名前でも、Smollett の *Ferdinand Count Fathom* にも出て来るし、更に Charlotte Smith の *The Old Manor House* にも示される。そして Charlotte Smith の場合にはその女主人公の名前が少し普通ではないということは作者によっても意識されていた。即ち、

To this little orphan, her great aunt Mrs. Lennard, who with all her starched prudery had a considerable share of old romantic whim in her composition, had given the dramatic and uncommon name of Monimia.<sup>(4)</sup>

と書かれているし、更に作中人物によって次のようにも言われている。

Why, said Mrs. Rayland, why would you, Lennard, give the child such a name? As the girl will have nothing, why put such romantic notions in her head, as may perhaps prevent her getting her bread honestly?<sup>(5)</sup>

このように意識的に用いられたこの romantic name の女主人公と、これも又 romance の名前を思い出させる Orlando との愛の物語がそこで語られているのである。それ故この romance 風の名前は、特にすぐれた特質を持つている

とも思えないこの人物を女主人公にするために極めて大切な働きをしているといつてよいだろう。もちろん作家によって夫々こうした名前のつけ方は異った意図でもってなされると考えられる。しかし大切なことは作家がその作中人物の名前に何等かの意味を附与しているということであろう。もう一つの例をあげると、Mrs. Gaskell の最後の傑作 *Wives and Daughters* の中で対立的に設定されている二人の女性——異父母姉妹——である Molly Gibson と Cynthia Kirkpatrick の名前であるが、一方は実際的で、他方は ostentatious な性格をよくあらわしている。Molly の父は彼女に次のように語っている。

“Cynthia! One thinks of the moon, and the man in the moon with his bundle of faggots. I'm thankful you're plain Molly, child.”<sup>(6)</sup>

ここでも名前は極めて象徴的な働きを示しているといつてよい。Cynthia と Molly いう名前を聞いただけで人はその二人の対立的な性格を予想するであろう。

Jane Austen の作品の中の人物の名前もいろいろな事情を考慮すると、極めて興味深い問題を持っているように思われる。そこで私は一見彼女の文学と余り関係のない、趣味人のやりそうな問題と思われそうだが、あえてその名前の持つ意義をここで問題にしてみたい。“Jane Austen and Peerage”という論文の中で既に Donald J. Greene が指摘しているように、Jane Austen の作中人物の名前には一連の貴族の名前が見られると言われている<sup>(7)</sup>。Greene は主として Arthur Collins の *The Peerage of England* (1756) という書物に注目し、この書物が Austen 家と親しい関係にあったと考えられる Sir Edgerton Brydges——この人の小説 *Mary de Clifford* (1792) と *Pride and Prejudice* との類似が Frank W. Bradbrook の最近の著書の中で興味深く指摘されている<sup>(8)</sup>——によって1808年に決定版として改訂されたというような事情をも考慮して、Collins の著書の中から Fitzwilliam だとか Darcy とか Wentworth とか Woodhouse とか Dashwood とか Watson などという名前

の貴族名を見出し、それらが皆非常に密接な関係で結び合って居り、更に詳しく述べることによって Austen の作中の主なる人物の名前——といつても姓のみ——の興味深い考察を行っている。彼は更に *The Peerage of England* の著者の名前にも注目し、その人物から見て、Arthur Collins と *Pride and Prejudice* の喜劇的人物 Mr. Collins との類推まで行っている。それは中々興味ある事実を示しているが、実は大事なのはそうした事実そのものではなくて、そのような事実の背景に考えられる Jane Austen の、たとえば Whig 貴族に対する態度であり、それによって解明される作品の意味である。

Greene の研究が専ら Austen の作中人物の姓を中心としているのに対して、その Christian name についても何等かの意味が見出せると思われる。Henry Mackenzie が先の引用で言っているような考慮をその名前を通して何時も意識し、それによって “novels of sensibility” の批判を行っていると言えるからである。但し Austen の場合は、本当にはっきりした、たとえば先の Monimia といったような、romance 風の名前をあからさまに使っていない。むしろその反対であるといってよいであろう。G. B. Stern が、Austen が自分自身の Jane という名前を作中に二度——Jane Bennet と Jane Fairfax ——使ったということについて、言っているのを聞こう。

It is extraordinary she should have no self-consciousness in using her own name as though there were not enough others in the language. I should not have been in the least surprised to have found a family in her novels with the surname of Austen. She uses the Christian names of all her brothers: Edward, Henry, Frank, Charles.<sup>(9)</sup>

Jane Austen がその作中において用いた人物名は事実自分の名前を含めて兄弟の名前などに見られる極く普通のものであったと言ってよいであろう。Romance に多いような妙な名前はことさらに避けたと考えられる。その証拠に Jane Austen 一家で唯一の romantic name であった母と姉の名前である Cassandra という名のみが家族の名前でありながら彼女の作中に一度も出てい

ないということからも略々推察されよう。Cassandra という名前は17世紀フランスの Romance 作家 La Calprenède の *Cassandre* という作品によって広められた、romance 的な名前であり、R. W. Chapman によればこの名前が Jane Austen の母方の Leigh 家に少くとも1690年ごろから代々伝えられて来ている事情から考えて見ると、La Calprenède の有名な romance と Jane Austen の姉に伝わった Cassandra という名前は強い関係があると想像される<sup>(10)</sup>。即ち十七世紀の終りにある貴婦人が自分の娘又は姪にその時夢中になって読んでいたフランスの romance の女主人公である Cassandra という名前をつけ、しかもその名前が代々伝わって、romance に対して極めて諷刺的な面を持っている Jane Austen の姉の名前の中に残ったという皮肉な事情が考えられるのである。Jane 自身が La Calprenède の romance をかりによまなくとも、彼女はその作品が諷刺されている Charlotte Lennox の *Female Quixote* をのしくよんだことが書簡に見えている。それ故 Jane がこの Cassandra という姉の名前を作品の中で一度も使用しなかったということは尤もなことと思われる。

しかし一方から言うと Jane Austen の作中人物の名前は、Cassandra というような romance 的な名前を避けて、もっぱら平凡な無色な名前のみを用いたのであるかというと、これも大いに問題であろう。一つの例を *Sense and Sensibility* にとってみよう。この作品と Jane West の *A Gossip's Story* との類似については既に J. M. S. Tompkins によって指摘されている<sup>(11)</sup>。それによると *Sense and Sensibility* におけるように対立した性格の姉妹によって、夫々表題の属性が示されている小説は Jane West の上述の作品以外には殆んど見当らないとのことである。もちろん Isabella Inchbald の *Nature and Art* に代表されるような二つの対立する価値を表わすような表題を示した小説が多いのは当時の流行で、それに関連して、一方が prudence 又は sense、そして他方が over-sensitiveness とか sensibility を示すという、二人の人物の対比が示され、over-sensitiveness を批判するという小説は決して West や

Austen の二人だけではない。ところが問題の対立した二人の作中人物が姉妹であるというのは，West と Austen の問題の二作品のみであると言われている。ところで Tompkins によれば，更に興味あることに，Mrs. West の小説では二人の姉妹の名前が Louisa Dudley と Marianne Dudley であるという。このことは，Austen の小説の姉妹の名前——Elinor と Marianne Dashwood ——と比較するとき，極めて興味深いことに思われる。この名前の類似——特に Marianne という名の一一致——は直接に Austen のこの作品が West の作品の影響を受けたという事実以上に，Marianne という名前に対して Austen がいだいた connotation が感じられるのである。即ち Marianne という名前はこうした小説的な背景を考慮しただけで，多少 romantic な特質があると思われるのである。Austen の若い頃の習作である *Love and Friendship* の女主人公 Laura の手紙の相手，即ち彼女の友達の娘，の名前が Marianne であり，又その他の習作の中でもこの名前は romance 的な特質を感じさせる。それ故 *Sense and Sensibility* の中の Marianne Dashwood の名前は，作者がその人物の特質として romantic over-sensitive なものを持っているように意図したものであり，又一般的にも読者の側で，この名前を持つ女性として相応しい性質の人物と考えられたのであろう。一体 Jane Austen の作品にあっては，Marianne の romantic connotation は別としても，一般に Mary とか Maria という名前でさえ必ずしも favorable connotation を持っていないようである。たとえば Mary Bennet, Mary Clifford, Mary Musgrove, Maria Bertram などである。更に脇役では Lady Mary Middleton, Maria Thorpe などがある。何れも好ましい人物の中には入らない。その理由が特に何であるかは様々の推測が可能であるが興味ある事実である。

*Pride and Prejudice* の中の女性の Christian name も二三興味ある事実がうかがえる。その中でまず Elizabeth Bennet の友人であり，例の勿体ぶった喜劇的的人物 Mr. Collins とあっさり結婚してしまう Charlotte Lucas の名前を考えてみよう。Charlotte という名前を *Oxford Dictionary of English Christian*

*Names* で調べてみると<sup>(12)</sup>、この名前が18世紀末に流行したことに対してゲーテの「若きヴェルテルの悩み」(Das Leiden des jungen Werthers, 1779) の女主人公が果した役割の大きさについてふれられている。即ちこの名前は romance 風の名前だといってよいだろう。ところがこの romance 風の名前は Marianne のような over-sensitive とか sensibility を示すという意味で romance 風なのではない。ゲーテの Charlotte はむしろ prudence の権化としての特性を持っている。それ故この名前には、むしろ普通に言う romantic とは反対の connotation があると考えられる。Austen は若い頃からゲーテの *Werther* は知っていた。たとえば *Love and Friendship* の中でも “The Sorrows of Werther” に対する言及を我々は見出す。そのような事情を考慮すると、Austen の作中にならわれる Charlotte という名前にはゲーテ的な connotation があると見てよいであろう。Robert Liddell は “Charlotte seems, for Jane Austen, to be the name of an essentially unromantic person.” と言っている<sup>(13)</sup>。このことは Austen にとっては単にゲーテ的な connotation ばかりではなく Samuel Richardson の Sir Charles Grandison の妹 Charlotte Grandison のような人物の image も重なっていることであろう。何れにしてもそれは unromantic な方向——よきにつけ、あしきにつけ——を指していたことは間違いないであろう。彼女の最後の未完の作品 *Sanditon* の中に出て来る Charlotte Haywood について、作者は次のように述べている。

She was a very sober-minded young Lady, sufficiently well-read in Novels to supply her Imagination with amusement, but not at all unreasonably influenced by them.<sup>(14)</sup>

この Charlotte Haywood はよい意味の unromantic な特質を示して居り、未完であるこの作品の中で占める位置はまだ明確になっていないが後半では明らかに中心人物になろうとしている。そしてこの人物の性格はこの諷刺的な作品の中での全体の雰囲気を決定するのではないかとも考えられる。

この Charlotte Haywood に対して *Pride and Prejudice* の Charlotte Lucas は negative な意味で考えられる prudence をあらわしている。彼女は分別のある女性として Elizabeth Bennet のよき友であった。Charlotte という名前の connotation にふさわしく “sensible, intelligent young woman” であった。にも拘らずあの馬鹿げた Mr. Collins との結婚を簡単に承知してしまうのである。Elizabeth 向って自分の決意を弁明しながら Charlotte は言っている。

I am not romantic you know. I never was. I ask only a comfortable home; and considering Mr. Collins's character, connections, and situation in life, I am convinced that my chance of happiness with him is as fair, as most people can boast on entering the marriage state.<sup>(15)</sup>

即ち、自らも認めるように彼女は全く unromantic なのである。彼女の Mr. Collins との結婚は、彼女の27才という年齢、美しくもなく、財産とてないという状態を考慮し、更に又 Mr. Collins が Bennet 家の財産を継ぐ人であるという考慮を加えると、全く彼女の prudence のあらわれだといえよう。だがもちろん Charlotte は一方では Mr. Collins に対して本当の love などを持っているとは思われない。*Pride and Prejudice* の中の結婚における態度で Charlotte は名前の connotation をよく反映した特質を示しているのである<sup>(16)</sup>。

この Charlotte と逆の側の極端な例として同じ小説の中で示されているのは Lydia Bennet の結婚であろう。Charlotte のが行き過ぎの prudence による結婚の悪しき例ならば、Lydia の Wickham との駆け落ちと結婚は prudence のない、romantic な結婚の悪しき例であろう。ところでこの Lydia Bennet の名前で、直ちに思い浮べるのは Richard Brinsley Sheridan の喜劇 *The Rivals* の女主人公 Lydia Languish であろう。Lydia Languish という romantic な女主人公は romance によって植えつけられた妙な考えによって、

叔母 Mrs. Malaprop の目を盗んで Ensign Beverley と密会し、終に財産を捨て、駆け落ちしてもこの貧乏な少尉と結婚した方が romantic でよいと考えている。ところが Ensign Beverley として現われるのは実は Captain Absolute で叔母もすすめるこの青年と Ensign Beverley は、Lydia にとっては恋仇であるが、実は Lydia の妙な romantic な性質を利用した Captain Absolute の trick で二人は同一人だと分るということでのたく終る喜劇が Sheridan の *The Rivals* なのであるが、この Lydia Languish は romantic な考えにふけり、elopement を好み、陸軍士官の後を追うことを愛するという特質を持っていることは注目すべきである。ところで Jane Austen はむろんこの劇をよく知っていたと思われるし、実際家族の記録によると1784年にはこの劇が Steventon の家で演ぜられた<sup>(17)</sup>。Jane Austen にとってこの劇は親しいものであったと想像される。ところで Lydia Bennet は Lydia Languish と同じように、romantic で elopement を好み、陸軍士官の後をいつも追っかけている。Lydia Languish のように都合よく行かなかったので、彼女の場合その無分別さがあからさまに示され、悲劇的な破局の寸前にまで来る。しかしここに示された性質からその Lydia という名前から来る connotation は明かである。E. E. Phare はこの関係について次のように言っている。“No doubt it was her (=Austen's) knowledge of Miss Langiush that had surrounded that name for her with a suitable aura of youthful silliness.”<sup>(18)</sup> 彼は又この二人の女性が James Fordyce の *Sermons for Young Women* に対して同じような反応を示すこともつけ加えている。いろいろ興味あることが考えられるが、今はこの二人の名前から生ずる connotation と、それがこの作品の中で先の Charlotte と対立して見事に示されているという事実に注目しようと思う。これら二つの結婚は悪しき例であり、一方は prudence のみの、他方はその反対の思慮のない結婚を示している。そしてその結婚の女性が何れもそれにふさわしい connotation を持った名前であることは興味深いことである。このような悪しき結婚の例と対立的に Jane と Elizabeth の姉妹の結

婚があるといってよいだろう。

*Jane* という作者と同一の名前には特にそれ自体に意味を持たせているとは考えられない。自分の名前を作中に用いるということは成る程少し異常なことかも知れないが、*Jane* という名前が極くありふれた名前であるという事情を考慮すればいいといえる。しかしそれでも多少問題になることがある。先ず Marvin Mudrick も指摘しているように一応 *Jane* と *Bingley* とは “a pair of story-book lovers” であるということである<sup>(19)</sup>。*Pride and Prejudice* における *Jane Bennet* という人物は控え目な、一見 romantic とは反対な人物であることは誰も認めるところであろう。それにも拘らず彼女には本質的に romantic な面があって、それらが全体としてこの人物に対する好感の持てる印象を読者にあたえているといってよいだろう。Austen 自身もこの人物を決して negative に描こうとしていないことは注意されねばならぬ。Romantic な面といったのは、たとえば、この小説をその最初の題名 “First Impressions” ということから見ると、romantic な first impressions の誤りが問題になっていると感ずるであろう。実際ここでは romance に多い first impressions に対する誤りがよい結婚と悪い結婚とを分けているようにも思われる。ところが実は *Jane* と *Bingley* の恋はそうではない。彼等は first impressions による恋でありながらしかも悪い結婚の例とはなっていない。*Jane* は実は romantic である。

このことは *Sense and Sensibility* の *Elinor* についても言えるし、又 *Emma* の中の *Jane Fairfax* についてもいえよう。*Jane Fairfax* なども表面上の平凡さにも拘わらず、実際は極めて romantic な人物である。主人公 *Emma* の推測によれば *Jane Fairfax* がかつて家庭教師をしていた家の Mr. Dixon は本当は *Jane* を愛して居り、*Jane* に金がないので別の女と結婚したものの、その関係が持続されているらしいと考えるのである。ところがその推測自体も多少 romantic な空想によっているが、実際はもっと romantic なところが *Jane* にあったことが後に知られる。言うまでもなく *Jane Fairfax* は Wey-

mouth という遊楽地で会った Frank Churchill と、先程の言葉で言えば、first impressions によって、ひそかに婚約しているのである。この romance 風な特質を内に秘めたところが Jane という名のこの人物にあることは Bennet 家の長女の場合と同様である。主人公 Emma が平凡な名前にまどわされて Jane Fairfax のこの内に秘めた romance を見抜くことが出来なくて失敗するとも解せられる。

Emma は又 Harriet Smith の本質を見抜くことが出来なくて失敗するのであるが、それは Harriet が平凡——Smith という姓があらわすように——なのであるが、romance 風な人間として Emma が考えることによっている。Romance 風だと考えるのは Harriet という名前によっているのではないかと思われる。たとえば Harriet がジプシーに襲われたところを Frank Churchill に救われたことから、Emma は彼等の間に恋愛が生ずると romance 風に空想するが、むろん誤りであり、そうした空想によって大失敗を犯す。この romance 風の空想は Harriet Byron が Sir Charles Grandison によって Sir Hargrave Pollexfen の手から救われたという romance からの類推を思い出させる。Sir Charles Grandison に親しんだ Jane Austen が Harriet という名前のこうした romance 風の connotation を感じていたことだけは事実であろう。こうして Emma の空想が生れたと考えられる。それ故ここでも Jane Austen は Harriet という名前の持つ connotation を利用しているといえよう。

このような Austen にとって多少はっきりと意味をもつと感ぜられる女性の名前の他にも、まだ多少推測を加えれば興味を以て見ることが出来る名前がある。たとえば今問題にした Emma の女主人公 Emma Woodhouse であるが、彼女の名前 Emma を再び *Oxford Dictionary of English Christian Names* で見ると、この名前について、"The form *Emma* was revived in the 18th C, probably under the influence of Prior's poem *Henry and Emma*, a paraphrase of the ballad of the 'Nut Brown Maid,' which was very popular."<sup>(20)</sup>

と書かれている。Jane Austen が直接に Matthew Prior の *Henry and Emma* からの影響はないとしても、この詩によって広められた Emma の image に注意する必要があるのではないだろうか。即ち女主人公らしいすぐれた資質を持ったそれでいて一面多少不幸な人物としてみられていたのではないだろうか。たとえば Austen は手紙の中で Miss Wapshire という人について “they say that she has always been remarkable for the propriety of her behaviour, distinguishing her far above the general class of Town Misses, and rendering her of course very unpopular among them.” といって更に “I wish I could be certain that her name were Emma.”<sup>(21)</sup> と述べている。Emma という名前に女主人公にふさわしい一応すぐれた人物を予想しているといつてもよいのではないだろうか。未完の断片である *The Watsons* の女主人公 Emma Watson も B.C. Southam の指摘するように “sensitive, intelligent, spirited, charitable, affectionate and high principle”<sup>(22)</sup> である。Emma Woodhouse もやはり女主人公として堂々として自信にみちている。その自信が却って危険なのであるが……。

さて今迄女性の名前ばかり問題にして来たのであるが、男性の名前についても少し問題にしてみよう。先ず *Henry and Emma* という Prior の詩の題名から、今度は Henry という名前について考えてみよう。一体 Jane Austen の兄弟の名前、即ち James, George, Edward, Henry Thomas, Francis William, Charles John という名前をならべてみると、そこには彼女の作中の主要な人物の名前があるといってよい。Alphabetical に言うと、Charles には Charles Bingley (*P.P.*), Charles Musgrove (*P.*), Edward には Edward Ferrars (*S.S.*), Edward Gardiner (*P.P.*), Francis 即ち Frank には Frank Churchill (*E.*), George には George Wickham (*P.P.*), George Knightley (*E.*), Henry は特に多く、Henry Tilney (*N.A.*), Henry Dashwood (*S.S.*), Henry Crawford (*M.P.*), Henry Knightley (*E.*), Henry Woodhouse (*E.*), Sir Henry Russell (*P.*) などである。次に James には、James Morland (*N.A.*),

James Rushworth (*M.P.*), James Benwick (*P.*) などがある。 John には John Thorpe (*N.A.*), John Dashwood (*S.S.*), John Willoughby (*S.S.*)。 Thomas には Sir Thomas Bertram (*M.P.*), ‘Tom’ Bertram (*M.P.*), William には William Collins (*P.P.*), Sir William Lucas (*P.P.*), William Walter Elliot (*P.*) がある。 これでも分るように殆んど主要な人物が見られる。この他に気付く名前といえば Fitzwilliam Darcy (*P.P.*) とか Edmund Bertram (*M.P.*) とか Frederick Wentworth (*P.*) —— 又 Frederick Tilney (*N.A.*) もいる —— とか Philip Elton などという名前にすぎない。 勿論これは網羅的にあげたものではないのでこの他にもいろいろあるだろうし、又重要なもので省略されているものもあり得ようが、完成された六作品から一応拾いあげたものである。

ところがこの男性の名前を兄弟の名前の中からとり上げて見ても、殆んど傾向らしいものは見当らないといえよう。 殆んど全ての名前にわたって様々な人物が配置されているからである。 ところがそれにもかかわらず多少の傾向を私達は見出しうると思う。 その一つが Henry ではないかと考える。 先の例でも分るように Henry は特に多い名前である。 それに Jane Austen は兄の中でも Henry Austen を一番親しく感じていたらしいことは明かである。 たとえば R. W. Chapman によれば、 “Henry is known to have been Jane’s favourite brother, as Edward was Cassandra. His character and his life were calculated to sustain her interest, though not always to promote her happiness.” といわれている<sup>(23)</sup>。 だから彼女の作中の Henry でも比較的好感の持てる人物が多いことは事実であろう。 Negative な価値を持たされている Henry Crawford にしても彼女のいわゆる “villain” の中では最も同情に価する、すぐれた点を持っていて好感の持てる人物である。 事実 Jane Austen は兄の明敏な性質との連想によっているか、 それとも別の連想か、 ともかく Henry という名前を持つ人間に好感の持てる人物を想像していたようである。 ある手紙の中で一人物を批評して次のように言っている。

Mr. W. is about 5 or 6 & 20, not ill-looking & not agreeable.—He is certainly no addition.—A sort of cool, gentlemanlike manner but very silent.—They say his name is Henry. A proof how unequally the gifts of Fortune are bestowed—I have seen many a John & Thomas much more agreeable.<sup>(24)</sup>

こうした言葉にも示されている Jane Austen が持つ Henry という名前に対する connotation は大よそ知られるであろう。作中の人物がこの connotation と大体一致しているのは当然のことであろう。

ところでこの手紙の中で Henry の反対の connotation を持つ名前として引き合いに出されている John と Thomas というのも注目してみる必要がある。先程あげた John の名前を持つ人物、即ち John Thorpe, John Dashwood, John Willoughby を見れば、何れも彼女の作品で否定的な価値を示している人物ばかりであることを知るであろう。Thomas でも大体それが言いうると考えられよう。その点でも手紙の中で言っている John や Thomas の名前に対する connotation は略々その作中の人物に適応出来るものとなっている。又 John などと同じく William という人物の名—Mr. Collins や Mr. Elliot —を考えると、決していい connotation を持っているように思えない。これらの悪い connotation を持つ名前は偶然兄弟の second name であることも興味あることかも知れない。だが実は私にはもっと興味深いことがある。それはこれらの名前が当時の文学的伝統の中で持つ connotation のことである。J. M. S. Tompkins は1770年から1800年までの小説の hero の名前について，“Of a moderate estimate, eighty per cent, of the heroes are called Henry. William, on the other hand, is a name of dubious, often villainous, complexion.”<sup>(25)</sup> といっている。即ち最もその時代の多くの小説についての知識に富んだと考えられる Tompkins 女史の判断による hero と villain の名前が Jane Austen の持っていたと考えられる connotation と大体一致することである。Tompkins 女史の言う Henry と William という名前の対立は、た

とえば、先に名前をあげた Isabella Inchbald の *Nature and Art* などに典型的に見られるものであろう。そこでは Nature をあらわす Henry と Art をあらわす William が対立的にあつかわれ前者のすぐれた点が示されている。その名前の connotation は Jane Austen にも大体あてはまると言えれば、Jane Austen も、好きな兄の名前を好感の持てる人物に配したというよりは、むしろその時代の文学的伝統が持っていた connotation に自然に従ったと考えた方がより正しいであろう。私は個人的な事情を全然無視しようとは思わないが、それでも個人的事情を越えたものをより重く見たいのである。

このように見ると Jane Austen の作中の男性の名前も、女性の場合と同様、さまざまな当時の文学的な伝統を反映して居り、その名前には著しく文学的な connotation が加味されていた。一方において初めのところであげた Henry Mackenzie の言葉のように Austen の当時の romance 風の名前に対する態度は明確である。なるべく奇異な romance 風の名前を避けているわけである。にもかかわらず他方では彼女の選んだ余り奇異でない名前の中にも Jane Austen は多分に文学的な connotation を加味し、それによって作品の方向を導いていると考えられる。言いかえれば、名前の使用を通してみても、一方には諷刺的な、伝統に対する反撃の姿勢と共に、他方では伝統的なわく組みに巧みに従っているという Jane Austen の文学の本質を見出すのである。それは anti-romance でありながら、しかも romance であった彼女の小説の特質をも物語るものであろう。私の論じた点は、他にもまだ多く推測される名前をすべて省いたので、決して充分であるとは思わないが、一つの試みとして現在のところ利用し得た資料の中から比較的確実度の強いものを中心に論じたものである。

#### Notes

- (1) この試論は昭和39年12月愛知県立女子大学英文学会総会で話したもののもとに補訂したものである。

- (2) B. C. Southam, *Jane Austen's Literary Manuscripts* (Oxford, 1964), p. 13.
- (3) *The Mirror*, No. 7 Tues. Feb. 16, 1779 in *The British Essayists*, Vol. XXXV (1802), p. 30.
- (4) Charlotte Smith, *The Old Manor House* in *The British Novelists*, Vol. XXXVI (1810), pp. 12-13.
- (5) ibid., p. 14.
- (6) Elizabeth C. Gaskell, *Wives and Daughters* (*Pocket Edition of Mrs. Gaskell's Works*, London, 1890), p. 120.
- (7) Donald J. Greene, "Jane Austen and the Peerage", *PMLA*, LXVIII (1953), pp. 1017-1031. Reprinted in *Jane Austen: A Collection of Critical Essays* (ed. Ian Watt) (Englewood Cliffs, N. J., 1963), pp. 154-165.
- (8) Frank W. Bradbrook, *Jane Austen and her Predecessors* (Cambridge, 1966), pp. 126-136.
- (9) Sheila Kaye-Smith and G. B. Stern, *Talking of Jane Austen* (London, 1950), p. 17.
- (10) See also E. G. Withycombe (comp.), *The Oxford Dictionary of English Christian Names* (Oxford, 1953), p. 56.
- (11) J. M. S. Tompkins, "Elinor and Marianne: A Note on Jane Austen", *R.E.S.* XVI (1940), 33-43.
- (12) E. G. Withycombe, *op. cit.*, pp. 59-60.
- (13) Robert Liddell, *The Novels of Jane Austen* (London, 1963), p. 50.
- (14) *The Works of Jane Austen*, Vol. VI (Minor Works), ed. R. W. Chapman (Oxford, 1954), pp. 391-92.
- (15) *Pride and Prejudice*, p. 125.
- (16) Frank W. Bradbrook によれば Charlotte Lucas と Charlotte Smith との名前による連想を推測しているが (*op. cit.*, pp. 135-136) これは極めて無理と思われる。当時の作家の名前、たとえば Fanny Burney や Maria Edgeworth や Isabella Inchbald や Ann Radcliffe や Charlotte Smith や Mary Wollstonecraft の名前と Jane Austen の作中人物との関係を想像するのは楽しいことであっても、どうも危険なことであって、私は今ここでは問題にするまでの証拠を持っていない。若し Charlotte という名に作家の名前を連想させるなら Charlotte Smith より或いは *Female Quixote* の Charlotte Lennox の方はどうであろうか。何れにしてもこんな推測をしだすと何でも都合のよいことが言えるようになりそうである。

- (17) W. Austen-Leigh and R. A. Austen-Leigh, *Jane Austen: Her Life and Letters* (New York, 1965), p. 64.
- (18) E. E. Phare, "Lydia Languish, Lydia Bennet, and Dr. Fordyce's Sermons", *N & Q*, N. 5. Vol. II (1964), pp. 182-3. 又 Frank W. Bradbrook, "Lydia Languish, Lydia Bennet, and Dr. Fordyce's Sermons", *N & Q*, N. 5. Vol. II (1964), pp. 421-423.
- (19) Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery* (Princeton, 1952), p. 106.
- (20) E. G. Withycombe, *op. cit.*, p. 98.
- (21) *Letters*, p. 97.
- (22) B. C. Southam, *op. cit.*, p. 68.
- (23) R. W. Chapman, *Jane Austen: Facts and Problems* (Oxford, 1948), p. 12.
- (24) *Letters*, p. 348.
- (25) J. M. S. Tompkins, *The Popular Novel in England 1770-1800* (London, 1932), pp. 57-58 n.